

空間干渉体

都市の生物的要素

指導教員 吉松 秀樹 印

6AEB3118手島 伸幸

1. 問題意識 「意図された様に感じないもの」

築地で発見した生物的なダクトに強い興味を感じた。ダクトには、人が意図したものなのにそうは感じさせない魅力があり、それを「都市の生物的要素」と位置づけて調査した (fig.1)。



fig.1築地のダクト

2. 調査 「都市の生物的要素」

都市は看板、植栽、外部階段など「都市の生物的要素」で溢れかえっており、街のファサードはそれらの要素によって形成されていた (fig.2)。



fig.2都市の生物的要素

3. 分析

ダクトは、看板、植栽、外部階段などとは違い直接建物から出ているものであり、建物そのものでもある。そんなダクトが外に飛び出している事によって、建物と外との繋がりを感じた

(fig.3)。

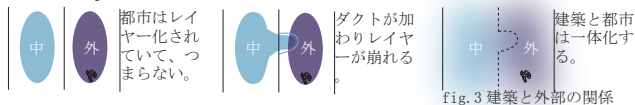
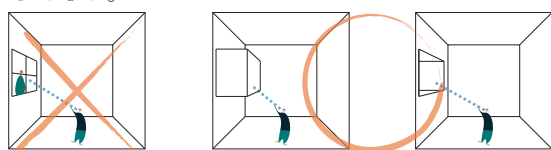


fig.3 建築と外部の関係

4. 手法

分析から建築を生物的に干渉する事によって空間が繋がっている様に感じる都市の空間体験があり、異なる空間の干渉によって空間を感じさせる (fig.4)。



開口の様に視覚とは異なる空間の繋がり

fig.4建築と外部の関係

5. 提案

グリッド空間を生物的に干渉させる事で、奥の空間を認識させる。

認識的に空間が連続している様な空間を建築化していく事で人々の動線を奥へと導くことを目的とする (fig.5)。

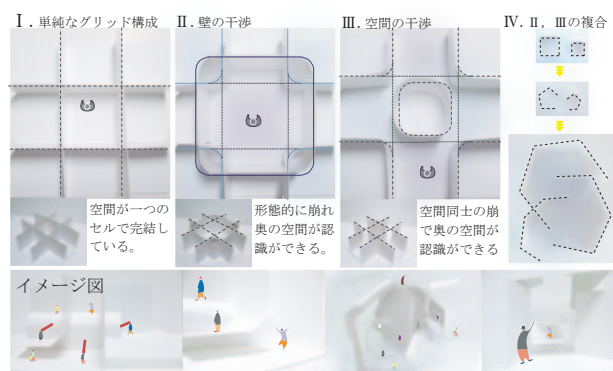


fig.5空間構成

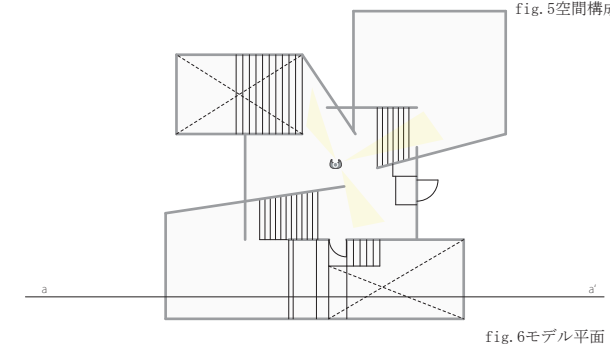


fig.6モデル平面

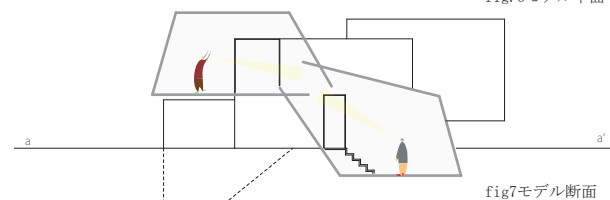


fig.7モデル断面

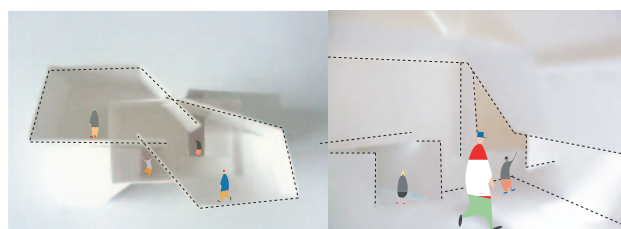


fig.8モデル写真